

平成28年度 石川県立飯田高等学校学校評価計画書（最終評価）

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
1 生徒の多様な進路希望を実現するための相応な学力養成	① 教員の授業改善と生徒の進路意識の向上を図る。	1・2年の1月模試で英数国の偏差値60以上が10%、20%、50%の基準を A:すべて達成した B:2つ達成した C:1つ達成した D:すべて達成できなかった	1学年 60以上が18%、55以上が36%、50以上が62%であった。 2学年 60以上が11%、55以上が29%、50以上が43%であった。	A B (進路指導課)	評価は総合で(A)と考えることができる。今後も生徒の学力を伸ばす飯田高校であり続けるよう努力していく。 課題は2年生における下位層の厚みであり、3年次における学習指導と進路指導においていっそうの努力が求められる。
	② 進路実現可能な学力を身につけるために自立的学習習慣を定着させる。	アンケートで予習復習を行っているかを調査し、肯定的な回答が、 A:70%以上 B:50%以上 C:30%以上 D:30%未満	予習復習を中心に家庭学習を行っている生徒は、1年生が43.5%、2年生が35.9%であった。	C (進路指導課)	課題中心の生徒が1年生で43.6%、2年生で46.2%であり、自主的・自発的な学習ではなく、課題等による外的な働きかけによる影響が強い。学習時間を伸ばすことにより、改善していきたい。
	③ 幅広い知識と、情報処理能力を身につけ、公務員試験に対応できる力を育成する。	公務員試験直前の模擬試験においてBランク以上の生徒の割合が A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	公務員模試受験者は13名であり、そのうちの7名が総合成績B判定であった。達成率は54%であった。	C (進路指導課)	C判定以下の生徒が6名であり、判断推理・数論的推理の分野での弱点を克服できない生徒がB判定に達しなかった。次年度は弱点分野の早期・重点的な指導を心掛けたい。
	④ いしかわ探究スキル育成プロジェクトでの研究・実践の成果を学校全体に還元し教育力を高める。	生徒による授業評価で、教員は授業において深く思考させる場面を増やし、学習意欲を高める工夫をしているとの回答が A:95ポイント以上 B:90ポイント以上 C:80ポイント以上 D:80ポイント未満	第1回評価72.6ポイント、第2回評価77.6ポイントでわずかに改善が見られたものの評価は低い。ポイントの算出方法は、ABCD4段階での評価を、 $(A \times 3 + B \times 2 + C) / (\text{回答数} \times 3) \times 100$ で計算したもので、100ポイント満点である。	D (教務課)	互見授業や講演会等の校内研修を充実させる必要がある。
	⑤ 学力スタンダードを策定することにより、AL等探究的な学習活動を取り入れるための教員の指導スキルの向上を図る。	生徒による授業評価で、授業中生徒が探究的な活動する場面があるとの回答が、 A:90ポイント以上 B:85ポイント以上 C:75ポイント以上 D:75ポイント未満	第1回評価76.0ポイント、第2回評価は80.2ポイントでわずかに改善が見られたものの評価は低い。算出方法は、④に同じ。	C (教務課)	学力スタンダードの策定およびその検証は進んでいるが、科目ごとに3年計画で進んでいる中途段階であるため、生徒の探究的な学習活動を実施できている科目は少ない。引き続き根気よく継続する。
学校関係者評価委員の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立的学習習慣を定着させるための取組に関して、中間評価に比べて14%も上昇している（伸びている）のにC評価なのは、基準の設定に無理があるのではないかと。生徒のモチベーションを上げるためにも基準を考え直す必要があるのではないかと。 ・ 学校評価計画における自己評価は、数値目標達成だけが重要なのではなく、取り組んだ内容が重要なので、そこも大事にして欲しいと思う。 				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 重点目標達成に向けた具体的取組に関する各課の評価基準については 適正な判断になるように見直しをしていきたい。 ・ 各課の取組に関しては、設定段階において適切な取組であるかどうかを判断しており、取組内容を大切にしている。 				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
2 生徒の規範意識の向上と生活習慣・学習習慣の定着	① 携帯電話・スマートフォンの使用ルール遵守と1日の使用時間を削減する指導を進める。	①生徒の自己評価アンケートから「SNS利用五ヶ条」が日常的に達成できた割合が A:85%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満 ②生徒の使用時間調査から1人あたりの1日平均使用時間が A:30分以内 B:40分以内 C:50分以内 D:50分より長い	SNSの使用ルールが遵守できていると回答した生徒は、1年85%、2年77%、3年92%。全体では、85%の結果となり、A評価。 1日の使用時間は、1年75分、2年57分、3年40分。全体では、58分となり、D評価。	A D (生徒指導課)	使用ルールやマナーはきちんと守られている。使用時間は、1年生が多く、特に入学時の早期指導が特に大切である。 使用内容を調査した結果、LINE、YouTube、音楽の時間の回答が多かった。また、ゲームに長時間費やす生徒もいた。使用内容を理解した個別の指導を行う。
	② 時間厳守の習慣の確立を目指し、「遅刻0運動」を継続する。	「遅刻0の日」が年間合計で A:160日以上 B:150日以上 C:140日以上 D:140日未満	現在、調査日数160日に対して、「遅刻0の日」が達成されたのは、121日。	B (生徒指導課)	例年、冬場に遅刻数が増加する。今後(2・3月)の指導を強化し、160日以上達成を目指す。また、遅刻者は、特定の生徒であるため、個別の指導も行う。
	③ 挨拶や服装・交通マナーなど基本的な生活習慣の定着について指導を徹底する。	基本的な生活習慣に関する自己評価アンケートから日常的に達成できた割合が A:85%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	基本的な生活習慣が身に付いたと回答した生徒は、1年99%、2年92%、3年98%。全体では、97%の結果となり、A評価。	A (生徒指導課)	ほとんどの生徒は問題ないが、頭髪服装検査で何度も指導を受ける者には、粘り強く指導を行う。
	④ 「ICP」の取り組みの意義を理解し、全校生徒が教職員とともに毎日の清掃活動をするともに、学校生活全般において環境美化に努める。	生徒の自己評価アンケート(班ごと)から日常の清掃をしっかりとできた割合が A:85%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	自己評価の状況が「たいへん良好」「良好」の割合が1年80.0%、2年76.9%、3年79.9%。全体では、78.9%の結果となり、B評価(2/3現在)。	B (保健厚生課)	班、担当場所により評価の差が見られるが、生徒は環境美化に対する意識をもって清掃活動に取り組んでいる。来年度は採点の正確化のため、評価方法の再検討も含め、さらに学習環境にふさわしい校内美化の促進に努めたい。
学校関係者評価委員の評価	<ul style="list-style-type: none"> 重点目標「規範意識の向上と生活習慣・学習習慣の定着」の実現に向けた各種取組におけるアンケート結果で2年生の数値が低く悪いのはなぜか。 生徒の中で一部ではあるが、路上に座り込むような見苦しい行為が見られることもあるので指導して欲しい。 				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> 本校だけの現象ではないと思うが、2年生は学校生活にも慣れ、学習面・部活動面でもゆとりをもって対応出来るようになる学年である。そのことが言葉は悪いが「中だるみ」現象として現れているのではないか。中だるみさせないように注意して指導して行きたい。 生徒指導に関しては家庭との連携・協力が不可欠。校内のみならず、校外においても規範意識を持った行動が出来るように指導していく。 				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
3 普通科、総合学科それぞれの特長を活かした教育活動の推進	① 進学希望者及び公務員希望者の進路実現を支援する体制を構築する。(普通科)	<p>年度末進路状況において、進学希望者の</p> <p>A:90%以上が進路希望を実現した。 B:70%以上が進路希望を実現した。 C:50%以上が進路希望を実現した。 D:50%未満が進路希望を実現した。</p> <p>公務員希望者の</p> <p>A:50%以上が進路希望を実現した。 B:40%以上が進路希望を実現した。 C:30%以上が進路希望を実現した。 D:30%未満が進路希望を実現した</p>	<p>国公立大学の合格者は現役48名で、当初希望者64名に対し75%である。</p> <p>公務員希望者10名中9名が、内定を受けており、達成率は90%であった。</p>	<p>B</p> <p>A (進路指導課)</p>	<p>今年度の合格状況は良好であり、生徒も最後までよく頑張った。難関3、金大10、国公立大40という学校としての目標も、4, 11, 50(過年度生2を含む)と健闘した。次年度以降このような結果を得ることは難しいと思うが、目標を高く掲げて努力すべきと考える。</p> <p>夏休み以降、模擬試験の得点率上昇の見られる生徒が多く、よく頑張ってくれた。半面全員合格には及ばなかったため、次年度は希望者全員の合格を目指したい。</p>
	② 個に応じた進学指導、公務員指導、就職指導を充実させる。(総合学科)	<p>年度末進路状況において、進学希望者の</p> <p>A:90%以上が進路希望を実現した。 B:70%以上が進路希望を実現した。 C:55%以上が進路希望を実現した。 D:55%未満が進路希望を実現した。</p> <p>公務員希望者の</p> <p>A:50%以上が進路希望を実現した。 B:40%以上が進路希望を実現した。 C:30%以上が進路希望を実現した。 D:30%未満が進路希望を実現した。</p> <p>就職希望者の内定が</p> <p>A:年内に100%を得た。 B:1月に100%を得た。 C:2月に100%を得た。 D:3月以降にずれ込んでしまった。</p>	<p>年度当初の進学希望者17名のうち、進学した生徒は13名で76%である。</p> <p>公務員希望者3名中2名のみが内定を受けており、達成率は67%であった。</p> <p>民間就職希望者は全員年内に内定を得ることができた。</p>	<p>B</p> <p>A</p> <p>A (進路指導課)</p>	<p>総合学科については推薦をうまく使って進路を確保すべきである。商業系を中心に方向を探るべきと考える。</p> <p>概ね順調に内定を頂いたが、途中で受験をあきらめ、進路変更した生徒や、一次試験に合格しながら、二次の面接で不合格となった生徒もいた。次年度は二次対策も含めて指導を強化したい。</p> <p>早期に志望企業を決定し、就職試験対策をとることができた。最初の応募で内定をもらえなかった生徒も二度目の応募で内定を得た。次年度も年内の就職内定率100%を目指す。</p>

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
3 普通科、総合 学科それぞれの 特長を活かした教育活動 の推進	③ ・学習意欲を高めるため 検定・資格取得を推進する。 ・パソコン利用技術検定2級 ・第二種電気工事士	合格率が全体の A:60%以上 B:45%以上 C:30%以上 D:30%未満 ※(合格者数) / (受験者数)	パソコン利用技術検定2級 53% (9名/17名) 第二種電気工事士 11%(1名/9名)	C (工業科)	パソコン利用技術検定では筆記試験を苦手と感じる生徒が多かった。電気工事士は筆記試験合格が2名と難しく、実技試験では1名が合格した。弱点を早期に発見し、その対策を講じていきたい。
	④ 学習意欲喚起のための方策として、各種検定・資格取得を推進する。	学年及び系列の目標とする各種検定資格に対する取得率が A:75%以上 B:60%以上 C:50%以上 D:50%未満 ※(合格者数) / (受験者数)	合格率は全体で45.2%。 簿記検定 40/147 (27.2%) 情報処理検定 23/143 (16.1%) 珠算・電卓検定 187/288 (64.9%) ビジネス文書検定 176/334 (52.7%) 商業経済検定 13/37 (35.1%) 英語検定 65/166 (39.2%) の結果である。 全体 504/1115(45.2%)	D (商業科)	情報処理検定では筆記試験を苦手としている生徒が見受けられた。次年度は資格取得に対する取り組みを強化するため、生徒への意識付けを行うとともに、過去の傾向や生徒の弱点を分析し、直前の補習対策を強化し、合格に向けて生徒の指導にあたりたい。
	⑤ 一般社会の基準に耐えうる発表態度やマナー、責任ある態度を身に付けさせるための発表会を普通科にも取り入れる。	事後アンケートにおいて、発表する力が身に付いたと実感できた生徒が、 A:70%以上 B:50%以上 C:30%以上 D:30%未満	事後アンケートでは、67%の生徒が発表する力が付いたと実感できたと回答した。	B (教務課)	グループやクラスによって取り組みに温度差が見られるものの、多くの生徒が発表する力が身に付いたと実感している。次年度以降も優れた発表に触れる機会を増やすことにより、さらなる向上を図りたい。
学校関係者評価委員の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・本校に対する期待を考えると、学力向上が重要な課題であり、そのためにも教員一人ひとりの授業改善が第一。先生方の力量をアップさせ、最上位層とともに中・下位層へのきめ細やかな指導をお願いしたい。 ・各種検定の合格状況が、到達目標に対してC、D評価と低いようだが、全国的な検定合格率はどのような状況か。 				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・互見授業の在り方を見直し、教員一人ひとりの授業改善につながる効果的な取組となるよう今後とも努力していきたい。 ・工業と商業とでは若干違いはあるが、全国的には1級（1種）合格率は1割程度、2級（2種）は4～5割程度ではないかと思う。 				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
4 地域の教育力を活かした教育活動を展開し、地域と連携した学校づくりの推進	① 本校が実践する教育活動や学校行事に関する情報発信を積極的に進め、本校に対する地域の理解を深める。	学校HPの更新が A:週1回以上 B:2週間に1回以上 C:3週間に1回以上 D:月に1回できた。 保護者及び地域代表者に対するアンケートの回答で、広報活動を A:十分に行っている。 B:まあまあ行っている。 C:あまり行っていない。 D:全く行っていない。	学校HPが年間を通して週1回以上のペースで更新できた。 保護者・地域の方々の評価アンケート結果では、96.4%の肯定評価を頂いた。 (A:43.8%、B:52.6%、C:3.1%、D:0.4%)	A A (総務課)	校内の連携により学校HPの更新がスムーズにできた。 保護者・地域の方々の評価アンケート結果では、A評価がB評価を上回ることは出来なかったが、肯定評価が中間評価を上回ることができた。
	② ゲストティーチャーやチームによるフィールドワークを取り入れた課題研究活動を、普通科にも導入する。	校外の講師の招へいや施設見学などの連携を通じた課題研究活動を行った普通科のグループが、 A:70%以上 B:50%以上 C:30%以上 D:30%未満	校外との連携を取り入れた活動を実施したグループは全26グループのうち19グループ、73%であった。	A (教務課)	グループにより温度差があるものの、先行グループの突出により他グループが刺激を受けた。 次年度も引き続き実施する。
	③ 地元の小学校高学年・中学校を対象に、理科実験授業を学期に1回行い、理科に関する興味・関心を高める。	実験内容に興味を持ち、自ら理解を深めるための考察や追加実験をしたいと回答する児童・生徒の割合が A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	追加実験をやってみたいという生徒が、93%であったが、年3回の実施は困難であった。	B (理科)	次年度は年2回実施する。
	④ 保護者懇談会への参加を含め、積極的な学校行事への参加をお願いする。	会員数410名のうち保護者懇談会への参加を含め、学校行事への参加回数が3回以上の割合が A:80%(317人)以上 B:60%(238人)以上 C:40%(158人)以上 D:40%未満	今年度は、保護者懇談会への参加を含め、学校行事への参加回数が3回以上の割合が82%(335人)以上であった。	A (総務課)	総会をはじめ本校の様々な行事に積極的に参加していただいた。来年度も引き続き学校に足を運んでいただけるよう、行事等の告知に力を入れていきたい。
	⑤ 地域のさまざまな立場の方々に講師を依頼し、平時の授業(地域学Ⅰ、産業社会と人間など)を協同して創り上げる。	地域の方々に講師に招き、授業(フィールドワーク)をおこなった時間数が、 A:40時間以上 B:30時間以上 C:20時間以上 D:20時間未満	地域の方を講師にお招きした時間が 地域学:14時間、商品開発4時間 産業社会と人間:8時間 総合的な学習の時間:4時間 社会人基礎:1時間 (計31時間)	B (総合学科)	昨年度の反省点であった「継続的な連携」は、一部分で取り入れることができた。今後はさらに学年・科目横断的な外部連携にも取り組みたい。
学校関係者評価委員の評価	・部活動と学習の両立。ボランティア活動だけではなく、日常的な教育活動の中で、生徒の主体性・自主性を育てる行事の推進をお願いします。				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策	・今年度新たな取組として「ゆめかな」プロジェクトを立ち上げた。地域と連携しながら、地域の中で飯田高校がどうあるべきか、何が出来るのかを生徒一人一人が自分の問題として受け止め、考えて行こうとしている。単年度の取組ではなく継続的な取組として推進していきたい。				

